

## 【1年次研究】

# 上達を実感し、主体的により良い表現を目指すICT活用

～国語科「話すこと・聞くこと」の学習を通して～

村山市立楯岡小学校 齋藤愛美

### <研究の概要>

本研究では、話し合いを繰り返すためのICT機器の効果的な活用について考察した。話し合いの場面で、音声を文字化することができるアプリ「UDトーク」を活用し、話し合いの文字化資料を作成する実践を行った。音声を文字として残して繰り返すことで、上達を実感したり、話し合いを技能として身に付けたりすることができると考え検証した。その結果、これまでは音声として消えていた話し合いを、文字として残し、話し合いの過程等を繰り返すことができた。それ以外にも、話し合いの過程で、文字として残すことを意識することで、意見が整理されたり、日常会話とは異なる、よりフォーマルな話し方で話す意識が見られたりした。繰り返すに特化した使い方だけでなく、話し合いの過程においても有効であった。

## 1 研究テーマ

「話すこと・聞くこと」の領域では、音声言語が消えてしまうことに指導の難しさを感じている。録音や動画に撮ることも考えられるが、話し合い活動で動画等を活用すると、話し合いの内容ではなく、話し方に注目してしまいがちである。活動に適した記録の撮り方があるといえる。言葉に着目して繰り返すためには、話し合いの文字化が有効である。話し合いを録音したものを文字起こしする「文字化資料」の実践は、その効果を知りながらも、なかなか実行することができなかった。すべてのグループの音声データを次の授業まで文字起こしする作業は、とても時間がかかる。そこで、見えないものを可視化・記録するためにICTが使えないか考えた。文字化資料の実践を気軽に手の届く実践にしたいという思いがあった。話し合いの言葉に着目して繰り返すことで、話し合いの技能の向上を目指したい。

特に2名を抽出児童として取り上げる。A児は、「自信が持てない子」。B児は、「自分の意見に自信がある子」である。話し合いを通して、考えの良さを認められたり、友達と新たな考えを作り上げたりすることを楽しんで欲しい。話し合うことの技能の向上に加え、話し合いが、児童の自己肯定感や共感的な心の成長になること

を目指している。

## 2 研究の視点

- (1) 繰り返しの視点を明確にする
- (2) 自己を客観視し、繰り返すためのICT活用

## 3 研究の方法と計画

### (1) 視点1について

ICT機器で残した記録を見るポイントを明確にし、良い点や改善点について、児童が納得しながら活動を進められるようにする。

本実践では、話し合い後、話し合いの手順や目的・条件に沿った話し合いができていないかタブレットを使った記録で確認する。

そのために、単元を通して、教科書の教材文を話し合いのモデル資料として活用し、話し合いのイメージを共有する。CD資料を聞いたり、教材文を「話し合い台本」としてくり返し音読したりしながら、話し合いの手順を確認する。また、発問や指示により、視点をもって「話し合い台本」を再読させ、目指すべき話し合いに気付かせていく。教師にとって、目指すべき話し合いの姿を明確にする必要がある。

## (2) 視点2について

自分の姿を客観的に確認しながら学習を繰り返すことで、上達を実感したり、改善点を捉えたりすることに役立つ。

本実践では、音声を文字化することができるアプリ「UDトーク」を使用し、話し合いの音声言語を可視化した文字化資料を用いて、グループの話し合いを繰り返す。音声入力機能のあるICT機器やアプリはさまざまある。

「UDトーク」は、他と比較し、会話の間を認識して、自動で句読点を付けたり改行したり



りしながら表示されるため、繰り返しで活用しやすい。グループで一つのタブレットを使い音声入力していくが、同じ教室で使用すると、他のグループの音声もひろってしまうため、それぞれ別の場所を使用することにする。

## 4 研究の実践

### (1) 実践1

#### ア 実践の概要

##### (ア) 単元名

目的や条件に応じて、計画的に話し合おう

第6学年 国語科

「みんなで楽しく過ごすために」

(光村図書)

##### (イ) 本時の目標

目的や条件、話し合いの手順に基づき、グループの「仮の結論」を提案する活動を通して、話し合いで考えを一つにまとめたり、話し合いを繰り返ったりできる。

##### (ウ) ICTの活用について

音声を文字化するアプリ「UDトーク」を活用し、話し合いの発言を文字として残

す。また、その文字化資料を用いて、グループの話し合いを客観的に繰り返す。

## イ 子供の学びの姿

### 【「UDトーク」を扱う練習】

#### ①操作慣れ

言葉集めなどの簡単なゲームをしながら、UDトークの操作に慣れさせる。

#### ②「話し合い台本」読み

教科書教材のモデル資料を読み、音声入力の練習をする。はっきり話さないと認識されないため、上手く文字化されるか、児童にとっては、話し方を意識するきっかけになった。また、モデル資料を意欲的にくり返し読ませることができた。

#### ③他教科での話し合い

台本を読むのとは違い、考えをまとめながら話し方も意識するというのは、難しさが増してくる。はっきり話すことができたかどうか、UDトークの画面を見ればすぐにわかるので、児童にとって、話し方の評価がすぐに受けられる楽しさがあった。

一方で、UDトークが音声を認識できたかどうか気になり、話し合いに集中できなくなることもあった。そのため、画面を紙で覆う工夫をし、話し合う場面と、繰り返す場面の区別をつけた。



### 【「UDトーク」を使った話し合い】

本時は、前時「考えを広げる話し合い」の続き、「考えをまとめる話し合い」を行う。導入で話し合いの手順を確認しながら、モデル資料を使って話し合いのイメージを共有する。

#### ①伝えたいことを整理して伝える

マイクをオフにした状態で、一度つぶやいたり相談したりし、伝えたいことが決ま

ると改めてマイクをオンにし、音声を入力している姿が見られた。思考を促す自然な会話と、相手に伝わるフォーマルな話し言葉とを使い分けている様子が見られ、伝えたいことを一度整理し、言葉を選んで伝えようという意識が見られた。



## ②話合いの記録

前時の「考えを広げる話合い」では、グループ全員がメモを取りながら話合いをしていた。メモをするために、話合いが止まってしまう、質問など、十分に意見を言うことができなかった。本時では、必要に応じてグループで一人だけ記録者を用意し、他の人は話合いに集中することにした。話合いの量が増え、意見が出なくなると、これまでの話合いの流れを「UDトーク」を使って確認するなど、「UDトーク」を議事録としても活用していた。一方記録者の方は、話合いの助けになるよう、意見を表に整理・分類しながら記録している。紙とICTとを併用しながら、選択して使うことができた。



## ③ふり返り

20分の話合いの文字数を見ることで、たくさんの意見が交わされた充実感が見られた。

「UDトーク」または記録者のメモを見ながら、項目に沿ってふり返っていく。「どんな共通点を見つけたか」「問題点は何か」

などは、メモでも確認できた。「誰の意見が良かったか」「みんなの合意があったか」などと問うと、「UDトーク」が活用できた。「〇〇さんの意見が良かった。」と記憶をたどり、「UDトーク」の画面をさかのぼりながら発言を探す様子が見られた。前後の文脈を確かめたり、発言をそのままをふり返ったりことできるのは音声入力ならではである。たくさんある記録から、自分たちの話合いを思い出しながら、見つけたい部分を見つけたり、誤変換も読み取ったりしていた。

## 【児童の感想】

### ①「UDトーク」について

- ・人に伝える時は、「短く」「わかりやすく」ということが大切。はきはき言うことを意識して頑張りました。
- ・AIなので、しっかりしゃべらないといけないので、しゃべるコツをつかめた。



### ②話合いについて

- ・話合いの手順を学習して、みんなの意見が出やすいので、すごく話合いが進みやすいことがわかりました。
- ・改善点がしっかりしていれば、みんなも合意してくれる結論になるのだろうと感じました。
- ・目的や方向性がはっきりしていると話合いもスムーズになるし、上手に伝えられるので良かった。

## 5 結果と考察

### (1) 視点1

- ・活動の細分化

「UDトーク」を扱う練習をする際に、練習の目的ごとに活動に分けている。また、話合いについても、「考えを広げる話合い」と「考えをまとめる話合い」に分けて話合いをしている。「ふり返りの視点を明確にする」ことを意識することで、「活動の目的を明確にする」ことにつながり、活動を目的に合わせて細分化して考えるようになった。また、「着目する点に特化したICT活用」が分かるようになり、目的や付けたい力に合ったICTを選択し、活用することにつながった。

## (2) 視点2について

### ・見る視点を与える

「着目する点に特化したICT活用」で提示された資料をどのように使うか、見る視点を与えていた。

本時の導入では、モデル資料を使い、問いを与えながら「話合い台本」を読み、話合いのイメージを共有していた。ふり返りについても、「UDトーク」の文字化資料を見るための視点を与え、具体的にふり返ることができた。

今回は、グループでふり返りを行ったため、「〇〇さんの意見が良かった。」という友達からの評価に加え、発言の良さを具体的に伝えることができた。ICTは自分を客観視できるツールでもあるが、グループでのふり返りにより、友達の良さを具体的に伝え合い、認め合うことにもつながった。

### ・人がAIに協力する

ICTの活用に関して、意図していたこと以上に効果が見られた。「UDトーク」を使うことにより、話し方にも気を付ける様子が見られた。「AIを使いこなすために、人がAIに協力しなければいけないよ。」という声かけを行った。「UDトーク」が音声を認識しやすいよう、はっきりとした話し方で話す意識づけになった。

## (3) その他の考察

英語のスピーチなどを動画に撮り、練習の

ためにふり返ろうとすると、「自分一人なら見て見たい。」という声が聞こえていた。動画を撮られること、大勢に見られることに抵抗のある児童が当初は多かった。

今年度、体調不良で急に学校に来られなくなった児童がいる。そんな友達のために、授業や休み時間など、学級の様子を常に動画を撮影していたり、Zoomを使って交流したりした。以前は動画を撮られることに抵抗を示していたにも関わらず、いつの間にか、カメラを向けると、にっこり手をふってくれるようになった。そんな様子に「撮られてくれてありがとう。」と伝えると、カメラ目線でポーズをとる児童が増えてきた。動画を見る人が自分以外の人でも、この動画を見る友達に向かって、自然と笑顔を見せてくれた。

日常生活で動画を撮ることが自然になり、ICTで記録を残すことに抵抗がなくなった一要因であると考えられる。一人で見ていたものをみんなで見られるようになった。「自己を客観視する」ふり返りから、「友達を認め合う」ふり返りができるようになった。抵抗感がICTを記録として活用する妨げになることも多いと考えられるが、「仲間と一緒に、学びを記録すること、鑑賞することは良いことだ。」という実感がもてる学級づくりも、大切だと感じている。

## (4) 今後の課題

「話すこと・聞くこと」の他の活動でも、付けたい力を焦点化し、その力を育むために、適切なICTを活用し、実践していきたいと考える。本来見えないもの・消えてしまうものを可視化できる、ICT活用にしかできない学びを、次年度も探していきたい。

## 6 参考文献

- ・『話すこと聞くこと』の授業パーフェクトガイド 長谷浩也編著 明治図書
- ・『合意形成能力を育む「話し合い」指導—理論と実践—』長谷浩也・重内俊介著 明治図書